参　考　資　料

内容目次

＜第１章関係＞
１　朝日新聞 2013 年 1 月 14 日付社説

＜第 2 章関係＞
２　科学教育センターの事業展開と大学生・大学院生が支援参加している事業の概要
３　学内イベント参加学生数
４　本学学生支援 GP「いのち・つなぐ・ちから」（パンフレット）
５　「夢をかたちに　工学院大学学生プロジェクト」（パンフレット）

＜第 3 章関係＞
７　2011 年度学生部調査結果（新入生、3，4 年生）
８　卒業時満足度調査　2013 年 3 月 19 日実施【結果】
９　生協学生生活調査概要（抄）（大学生協連堀内久美氏報告）
１０　「学生の元気」に関する学内アンケート集計結果
（１）学科・部署対象
（２）教職員対象

＜第 4 章関係＞
１１　各大学の課外活動状況
１２　各大学 GP 報告書から※
※「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」事例集（編集・発刊：独立行政法人 日本学生支援機構、監修：文部科学省）から転載
松本大学松商短期大学　元気なキャンパスをつくり出す仕掛けの創出
富山高専　遊－友－You プロジェクト
大阪大学　市民社会におけるリーダーシップ養成支援
プール学院大学　発達障害を有する学生に対する支援活動
広島工業大学　技術系女子学生の継続的なキャリアデザイン
北見工業大学　夢を育む e-学生支援
島根大学　学生の自主活動の評価と教育効果の向上

＜第 5 章関係＞
１３　第 6 期自己評価運営委員会報告書（まとめの部分）

朝日新聞　２０１３年１月１４日　朝刊　１１ページ　東京本社

成人の日

レッテル貼りを超えて

例年、きょうの社説は20歳へのメッセージを送ってきた。

今年は新しい仲間を迎える大人社会の側に向けて書きたい。もちろん、自戒を込めて。

新成人の世代は、あれこれとレッテルを貼られてきた。

薄っぺらい教科書で学んだ、勉強不足のゆとり世代。

内向き志向で、受け身。

そう決めつけずに、少し冷静に見つめ直してみよう。

全国大学生協連が毎年、2万人の学生を調査している。

大学生活の重点を「勉学」と答える率は、80年代や90年代よりかなり高くなっている。授業に出るコマ数も、90年代の前半よりずいぶん増えた。「まじめ化」の傾向がある、という。

「ゆとり批判に親や先生が焦り、むしろ勉強させられた」。新成人のひとりが言う。

ゆとり教育は、始まるやいなや学力向上にかじが切られた。大学も出席を厳しく取るようになった。言われるほどに、「ゆとり」の実感はない。

「内向き」はどうだろう。

一例に挙げられるのは海外留学が5年続けて減ったことだ。とはいえ、バブル期に比べると倍の6万人に増えた。

ボランティアの参加率は上の世代より低い。ただ、総務省の調査では、5年前と比べて率が最も伸びたのは20代前半だ。

新成人は、小さいころからケータイやパソコンがあった。

「だからリアルな人間関係が希薄になっている」とか、逆に「いつもケータイを気にして、友だち地獄に悩んでいる」とかとりざたされる。

しかし、生協連をはじめ各種の調査結果を見ると、どちらもそうは言えない。東京学芸大の浅野智彦准教授はそう語る。

大半は腹を割って話せる人がいるし、ケータイ依存が深まっているともとれない。つまり、世間の見方とデータの間にはギャップがある、という。

ｉｖｏｔｅ（アイ・ヴォート）という学生団体がある。様々な大学から25人が集まり、20代の投票率を上げる活動をしている。

活動のひとつに、「居酒屋ｉｖｏｔｅ」がある。国会や地方の議員を招いて、飲みながら議論する。「世代が違っても、目的意識が同じなら通じ合える。そう実感した」。20歳のメンバーが言っていた。

「若者を『問題』としてみようとする大人の視線が、むしろ問題かもしれない」と浅野准教授は指摘している。

私たち大人の側から世代の壁を築いてしまわないよう、胸に刻みたい。

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。